



## 令和2年度海洋水産資源開発事業<底びき網（かけまわし）：日本海北部海域>の調査概要

調査船：第二十三茂浦丸（35トン）

調査期間：令和2年4月～令和2年6月

調査海域：日本海北部海域（秋田県沖合海域）



### 調査の目的

秋田県沖合海域で操業するかけまわし漁法の底びき網漁業をモデルに、労働環境の改善や生産性の向上を目指した取り組みを行う。主に、ドロやクモヒトデ類等の不要物の入網抑制を目指した既存漁具の改良や、不要物の入網を抑制しつつ、漁獲効率の向上も目指す新規漁具を対象とした調査を行った。また、不要物の入網抑制による効果を活かした高品質化や未利用魚等の活用による収益性の改善に向けた調査を行った。

### 本年度調査の主な成果等

令和元年度までの調査で対象とした調査実施地域の既存漁具の改良仕様を確定するために、操業試験を引き続き行い不要物の入網抑制効果や漁獲性能を再確認した。その結果、既存漁具に改良を加えた漁具（以下、「改良漁具」とする。）では、不要物の入網抑制および漁獲対象種の漁獲確保の両方で十分な性能を有することが確認された。令和2年度中には、これまでの調査結果を受けた形で、調査実施地区の船団内数隻が保有漁具の改良に着手し、本調査の成果普及が始まった。

また、漁具漁法に関する新たな取り組みとして、新規漁具（図1）を用いた操業試験を行い、改良漁具と比較することでその性能を評価した。その結果、主要漁獲対象種であるトヤマエビも含めて、十分な漁獲性能を有することが示された（図2）。一方、操業に支障を来すような漁具トラブル（揚網時に荒手網から袖網に掛けて捻れが生じる）が頻発し、操業で継続的に使用する面での課題が残った。なお、新規漁具のそれぞれの力綱の寸法を再計測したところ、一部で設計時の寸法よりも長くなっていることが確認された。この点が漁具トラブル頻発の一因になったと考えられ、今後の対応として、使用する力綱の材質変更により対策を図る必要性が示された。

令和元年度調査に引き続き、トヤマエビを活出荷することによる付加価値向上の効果を確認した。また、未利用・低利用魚の積極的な活用による漁獲物販売収入の向上を目指して、いくつかの魚種を試験出荷した結果、それらの水揚げ金額は全体の4%であった。比較的に入網量が多い未利用魚等であるウロコメガレイを対象に、産地ドレス加工（図3）による付加価値向上と新たな販路開拓を図る試験を実施した。

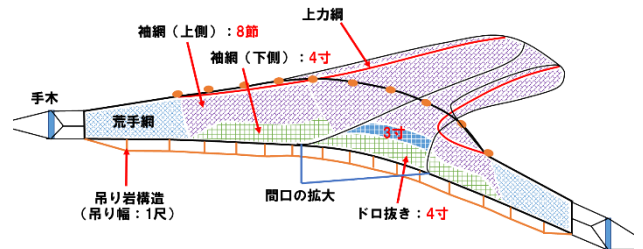


図1 新規漁具概略

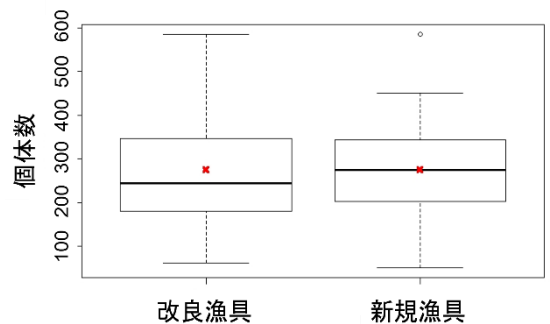


図2 トヤマエビの入網個体数比較



図3 ドレス加工したウロコメガレイ